

明けましておめでとうございます

きのとみ

2025年は乙巳 粘り強く再生の年に!

古代中国の暦法、^{じっかんじゅうにし}十干十二支は「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」の十干と、「子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥」の十二支との60の組み合わせがあり、今年^{きのとみ}の乙巳は42番目にあたります。

「乙」とは、「巳」とは

「乙」は^{きむ}「軋」を意味し、植物が成長していくこと。柔軟性や協調性を象徴、周囲との調和を保ちながら自身の目標に向かって進んでいく力を表しています。「巳」は「蛇」です。蛇にはネガティブなイメージもあるが、豊穰や金運を司る神様で、神聖な生き物とされてきました。逞しい生命力、脱皮のたびに表面の傷が治癒していくことから、医療、治療、再生のシンボルともされ、それゆえWHOのロゴマークにも使われています。



上に掲げた書は、書家の^{つだせいざん}津田西山さん(元男声合唱団コール・グラント)の書かれた乙巳「^{かかく}過客」です。一組の蛇のカップル、蝶タイの雄と雌を表わしています。過客とは旅人のこと、松尾芭蕉の「奥の細道」は、「月日は百代の過客は」で始まります。今年も新たな気持ちで一歩を踏み出しましょう。

書については下記URLでご覧になれます

https://rkato.sakura.ne.jp/tsuda_seizan_etoji/etoji6_hebi.pdf

近代日本音楽史塾「唱歌誕生!!!」 雅楽+讚美歌=日本の唱歌

子どもの頃から親しんできた唱歌、学校教育の場でどのような位置づけだったのでしょか。唱歌はどのようにして生まれた音楽なのか、と関心を寄せていたところ、「近代日本音楽史塾」がまさに「唱歌誕生」というテーマでセミナーを開くというので興味を持って聴講しました。

唱歌誕生!!

〔近代日本音楽史塾セミナー〕

雅楽と讚美歌が出会い、日本の「唱歌」ができるまで

2024年12月1日 東京音楽大学中目黒キャンパス

・基調講演：洋楽史再再考

北原かな子 (青森中央学院大学教授)

・報告1：保育唱歌と日本語のリズム

安田 寛 (奈良教育大学名誉教授)

・報告2：保育唱歌とその意義

ヘルマン・ゴチエフスキ (東京大学教授)

・報告3：「心のふるさと」を作った作曲家たち

北原かな子

セミナーは全国から約百名の聴講者が集まり、真新しい中目黒の東京音楽大学キャンパスにおいて開かれました。青森中央学院大学主催、同大学学長裁量経費支援事業として行われたもの。同大学の北原教授の熱意で開催に漕ぎつけたことがよくわかる中身の濃いセミナーでした。



北原教授は、1882年から刊行の『小学唱歌集』のとくに初編はほぼすべて讚美歌だったこと、1910年から刊行の『尋常小学読本』、『尋常小学唱歌』は**全曲日本人の作詞作曲**であり、それも編纂委員の合作であったことを強調されました。安田教授は、

宮廷作曲家たちが讚美歌を唱歌へ取り込む際、古来の五七五七七調の問題をどう扱うか、日本人に



もっとも馴染むこの音律をどう解釈するかに意を砕いたかを解説されました。ゴチエフスキ教授は、保育唱歌の代表例として「^{たみくさ}民草」を取り上げ、1文字に1音を充てるシラビックな作曲法を目指して奮闘した姿を浮き彫りにしました。セミナーの詳細はいずれレポートする予定です。

